

サンプル

強制幼児化施設―後編―

「ん……」

(あれ……寝てたのか……え?)

さっきまでホールにいたはずだ。遊びながら眠ってしまった部屋に運ばれたのだろうか?

(いや、何か……)

忘れていた気がする。

(何だ? 何を忘れて……?)

ホールで一体何をしていたんだっか。

(ぬいぐるみ……違う。絵本……違う……そうだ、誰かが来て……)

そうだ、思い出した。保護者との再会を喜ぶシーンを見たくなくて背を向けていたのだ。そして積み木で気を紛らわせていたらお菓子に見えた。それで食べて……食べた?

(いや、食べれないよな……しゃぶったのか……)

まさか積み木をしゃぶるなんて。そんなことをしてしまうなんて。

でも寂しかったのだ。まるで親を待つ子供のようで。

(待たたって、来てくれないのに)

そうだ、誰も来てはくれない。待てば傷付くだけだ。迎えになんて来てもらえない。だって、どんなに体調が悪くたって親が学校に迎えに来てくれたことなんて一度もなかった。それどころか両親どちらにも連絡がつかないと養護教諭が困っていたじゃないか。

(もしかして、充も――?)

充も滝口と連絡が取れていないかもしれない。それで困っていたらどうしよう。きつと優しいから滝口と連絡が取れないなんてことを言ってきたりはしない。でももしそうになったら――。

胸が痛い。ツキンツキンと何かに刺されるような、絞られるような鋭い痛み。

(なんでっ……)

どうしていつもこうなのだろう。どうして誰も来てくれないのだろう。

いや、ここにきて初めての排便のとき、充は駆けつけてくれた。大丈夫かと親身になって心配を――違う、それは仕事だからだ。それが充の仕事だから。だから駆けつけてくれただけ。仕事や利益の絡まない親や滝口が来てくれないのはやはり仕方ないことなのだ。

「あ……ああ……」

胸が痛い。苦しい。なんで、なんでいつもこんな思いをしなくちゃいけないんだ。

やっと、やっと親からの愛を諦められていたのに。親と自分は別の個人なのだと何年もかけて自分に言い聞かせ、やっと納得できたと思っていたのに。

中途半端な愛情ならいらなかった。大切にするとか可愛いとか愛してるとか、そんなのいらなかった。放っておいてほしかった。そしたらこんなに苦しまなくて済んだのに。

「ああああああああああ!!」

頭を抱えて蹲る。息が苦しい。痒くもないのに頭を掻き毟りたくなる。

(滝口っ……!!)

迎えに来てくれると思っていた。充もそう言っていたのに。なのに迎えどころか会いにも来てくれない。ここに来てもう一か月が経つ。その間に会ったのは一回だけ。それも前半だ。もう会っていない期間の方が長い。

面会はない。電話すらない。

(きつともう——)

「うああああ!!」

痛い。胸が痛くて勝手に涙が出る。

(もう傷付くことなんてないと思っただのに……)

「ああああああ!!」

「洋介くんっ! 洋介くん、大丈夫だよっ!」

「ああああ!!」

背中から感じる体温。知っている声。

「洋介くん、ごめんねっ、一人にしてごめんねっ」

「ああああ!!」

なんで、なんで充なんだ。どうして滝口じゃないんだ。

(分かっている、先生は仕事だから……)

仕事でなければ、洋介の元に来てくれる人なんていない。

「ああああ……」

涙がプレイマットを濡らしていく。水溜まりができていく。

「洋介くん……」

優しく名前を呼ぶ声が聞こえた。そして背中に重みが乗る。

「洋介くん、ここにいるよ、一緒にいるからね」

ゆっくりゆっくり背中を撫でられる。少しずつ気持ちが落ち着いていく。それと同時に、瞼が重くなっ
ていく。

「大丈夫……ちゃんと愛されてるよ」

~~~~~

「洋介、お布団の中でお漏らししてしまうかもしれないよ」

「っ!」

ガバ、と飛び上がった布団。中にいた洋介はペニスを両手で押さえていた。

「どうした? おしっこかな」

充からの報告で、洋介はすでに頻尿になっていると聞いている。排泄を我慢する環境を排除し、尿意を

感じた瞬間に漏れ出るように躡けてくれてあるのだ。

「出てしまったかな」

少しだけアンモニアの臭いがする。手をどかしてみるとペニスから黄色い液体が漏れ出ていた。

「おしっこ、と言ったから身体が反応してしまったかな。洋介が悪いわけじゃないよ。大丈夫」

もう、尿を途中で止めることもできないだろう。洋介の両手首を掴みペニスから離れた状態でそこをじつと観察する。

(いいものだな……)

勢いもなく流れ出る尿。羞恥に震える太もも。表情も見たいが、可愛く排尿するペニスの先端から目が離せない。

「大丈夫、全部出していい」

頻尿なせいか量は多くなかった。

(もう終わりか……)

もつと見ていたかったが仕方ない。水滴を残すペニスを持って、口に含んだ。

「っ！！！！ やあああ！！」

振ってすらいらないペニス。尿の味がする。しょっぱいと思うのに甘くも感じる。

くちゅ、と音を立てて唾液を絡め、舌と上あごで揉むようにペニスを愛撫してやると、そこはまたすぐに硬さを取り戻した。

「あつ、あつ」

いやいやと首を振ったのは最初だけで、洋介はすぐに嬌声を上げ始めた。本当に素直になったものだと思う。

「ああつ！ あつ、あつ」

尿とは違う味が染み出る。やはり若いせいか経験が浅いせいか感度がいい。

「イきたいときは我慢しなくていい。身を委ねていきなさい」

一度口を離して言つてやると、洋介はこくこくと必死に頷いた。その必死さが可愛い。恐らく口を離している間の暴発に耐えていたのだろう。

口の中を漱ぐときのように咥内でも揉み、裏筋を舌でゴリゴリと擦る。するとすぐ、太ももに力が入った。

咥内の空気を抜くようにバキュームして出し入れをすると、たった数回の動きで未熟なそれは精を吐き出した。

「ああああつ！！」

ペニスがびゅく、びゅくと揺れる。その動きさえ可愛くて、舌で味わうように押さえつけた。

「やあ……ああ……」

唇で抜いて残滓を押し出し全てを飲み込む。やはり洋介の体液は甘かった。

「洋介、上手にイけたな」

きつと言葉を発せないままの射精は怖かっただろう。イきたい、と言いたくなかっただろう。それでも我慢できたことを褒めてやる。

「いいこだ。頑張ったな」

「あう……たあ……」

「ん？」

「たあ……」

恥ずかしそうに滝口をちらちらと見ながら発せられる声。「たあ」というのはもしかして。

「呼んでくれているのか」

「あう……」

ずっと滝口としか呼ばれていなかった。けれど「たあ」と。それだけで感動してしまった。あの強気な洋介が、可愛く甘えるように「たあ」と呼ぶなんて。

「あぁ、たあだよ。一緒にいる」

射精後の感覚が落ち着くまで抱きしめて時間を過ごす。その間も何度も上手に射精できたことを褒めた。

約5万1千文字です。

どこを拾ってもネタバレになってしまうので、サンプルが短くなりました……。ハピエンです。

宜しくお願い致します！